

33 カ国リレー通信

<第 11 回> ブラジル

レシフェから傍観すると

渡 邊 利 夫

ブラジル大統領選挙

今ブラジルの朝野の関心事は、明年の大統領選挙である。当初ルーラ大統領に対する国民の高い支持率を背景に、その後継者である与党労働者党（PT）のジウマ・ロウセフ文官長と野党のジョゼ・セーラサンパウロ州知事（PSDB）の一騎打ちになるかと思われていた。そこに労働者党を離党した前環境大臣のマリナ・シルヴァ上院議員が「緑の党（PV）」から出馬する動きを示すと、シロ・ゴメス下院議員（PSB）も俄然再出馬の意欲を見せるなど、混沌とした様相を示してきた。

9月の世論調査結果では、セーラ州知事が34%、ロウセフ文官長が14%、ゴメス下院議員が14%、シルヴァ上院議員が6%という支持率であった。セーラ州知事（67）は、上院議員、カルドーゾ政権で厚生相、その後サンパウロ市長を務めるなど老練な政治家である。ネーヴェス・ミナスジェライス州知事と党の指名を争っている。ロウセフ文官長（61、女性）は、軍政下で左翼活動を行ったことで知られ、ルーラ政権になって国政に参加し鉱山エネルギー相、文官長を務め、「経済成長促進計画（PAC）の母」として名高い。ゴメス下院議員（51）は、セアラ州知事を務めた経歴を持ち、今回で3回目の大統領選出馬である。シルヴァ上院議員（51、女性）は、もともとアクレ州出身の労働者党員で、環境問題に造詣が深い新鋭の政治家である。

いずれにしても大統領選挙は来年10月の話であり、今から結論を出すには時期尚早であろう。

なお、2002年ルーラ現政権が誕生した時ブラジルの左傾化が随分懸念されたものだが、結局杞憂に終わった。高い支持率を維持するルーラ政権ですら長年の懸案である加重的な税制改革、競争力を低下させる労働法、行政の非効率、貧富の格差是正等の構造改革に手がつけられない。その前例を見ると、誰が勝ってもブラジルを大改革するような政策の変更は難しいと見るのが自然である。

流動化し始めた中南米

現在ブラジルが直面するもう一つのテーマは、軍の武器購入問題である。ブラジルは最新鋭の戦闘機36機、ヘリコプター50機、原潜一隻を含む潜水艦5隻の購入計画を進めている。実際ブラジルは、国境警備が手薄なアマゾンの密林地帯や大西洋の沖合にある海底油田防衛のために武器の更新を必要としている。ヘリコプターと潜水艦についてはフランスから購入することに決定したが、問題は戦闘機である。これまでに仏のダッソー社、米のボーイング社、スウェーデンのサーブ社に絞り込み、これから最終決定をする段階にある。報道では仏製が有力候補だ。

それにしても思い出されるのは、1962年カストロ政権が米国の裏庭でソ連から武器援

助を受けキューバ「ミサイル危機」を引き起こした悪夢や、ペルーのファン・ベラスコ革命政権（1968-75）がソ連製の武器を購入した事例である。冷戦時代に中南米の国が東側の国から武器を購入するのは、非常にまれであったが、今回ブラジルが欧州の国からとはいえ多数の戦闘機を購入し、域外国との軍事協力強化と軍備増強を真剣に検討している姿を見ると、時代の移り変わりをみる。

その背景には、まずブラジルが南米大陸のほぼ半分を占め、2億弱の人口を有し、GDPは世界第8位に位置する大国であるという事実がある。南米で初のオリンピック開催も実現する。また新興国 BRICs の一角を占め、大豆、砂糖、牛肉、鶏肉、オレンジジュース等の食料資源、鉄鉱石、ボーキサイト、ウラン、レアメタル等の天然資源、原油、エタノールなどのエネルギーにも恵まれている。ブラジルでは、このような潜在力を背景に、民主主義国として国際政治の中でもっと大きな役割を果たす必要があるとの大望が生まれつつある。

他方で、周辺国の動きとしても、ベネズエラのチャベス政権がロシアからスホイ 30 戦闘機を購入、また合同軍事演習を実施し、新たに戦車 T-22 等武器の購入を計画するなど軍備を図っている。また今年エクアドルは長年認めていた米国のマンタ空軍基地の使用をキャンセルした。先の南米諸国連合（UNASUL）会議では、ベネズエラ、エクアドル、ボリビア等が米国とコロンビア間の麻薬対策のための軍事協力強化に関する新協定に対し、地域の安全保障に脅威であると公然と異議を唱えた。

歴史的に米州地域は、国境を巡る小競り合いや国内紛争・軍事クーデター等の混乱はあっても、大規模な戦渦からはほど遠い地域であった。軍拡の歴史もない。その背景には、

植民地時代から来る文化環境が似ている上に、第二次世界大戦後の冷戦下で米国の圧倒的な力を後ろ盾にした米州機構（OAS）という地域安全保障機構が存在したという事情もある。しかし 1989 年ベルリンの壁が崩壊し、ミニ冷戦であった中米紛争が終結して約 20 年、米国にとって社会主義国からの脅威が減じた結果、中南米諸国に対する新たな外交のイニシアティブも打ち出されず、中南米各国が自己主張し始めると、地域の政治が徐々に流動化し始めてきた。このことは地域の安全保障体制の修正を意味する。

ブラジル文化発祥の地、東北伯

それにしても、在レシフェ総領事館のある東北伯は、上述のような米州の荒波には無縁で平穏である。東北伯は、歴史上砂糖生産を中心にブラジルで最も早くから発展した地域である。今世紀に入って、ブラジルの砂糖生産の中心地は南東北伯に移り、現在では伯生産量の 13% 程度を占めるに過ぎないが、それでもこの砂糖生産の富とアフリカからの黒人奴隷、そして先住民はこの地に豊かな文化を育んだ。はるか昔アフリカを旅立った人類の祖先達は、長い旅路の後ヨーロッパ、アジア・ベーリング海峡、奴隷（すなわち大西洋）という三つのルートを経て、再びこの東北伯の地で相まみえた。社会学者ジルベルト・フレイレは、ポルトガルからの植民者が経営する大砂糖農園で、いかにヨーロッパ文化とアフリカ文化が融合したかを、名著「大邸宅と奴隷小屋」に書いている。今でも近郊の砂糖農園を訪れると、豊かな丘の上に一面の砂糖キビ畑が波打ち、往年の景色そのままである。

その豊かな東北伯の文化を見る機会がカーニバルである。レシフェ・オリンダのダンスはリオのサンバと異なりフレボーが中心であるが、この踊りは黒人の格闘技であるカポエ

イラが原型であると言われている。またフレボアの他にもアフリカ文化を色濃く残すマラカトゥ・フラル、先住民の踊りが今に伝わるカボクリーニョなどのダンスがあり、本当に多種多様である。いずれもショーとして見るというよりは、ビール瓶を片手に踊りの輪に加わる参加型である。どの踊りも洗練された芸術というより大衆的で、土着の生活感にあ

ふれている。カーニバルで人々は熱狂し、一年の憂さを忘れる。そして時が止まる。

このレシフェ総領事館も、今年末をもって48年間の歴史に幕を閉じ、出張駐在官事務所になることになった。

(わたなべ・としお 在レシフェ総領事)

〔ラテンアメリカ参考図書案内〕

『大統領チャベス』

クリスティーナ・マルカーノ、アルベルト・バレーラ・ティスカ
神尾賢二訳 緑風出版 2009年3月 517頁 3,000円＋税

いまラテンアメリカで最も注目を浴びている時の人であるベネズエラ大統領の伝記。ベネズエラの二人のジャーナリストが、膨大な数の関係者にインタビューし、調べ上げた、出自から米国大リーグの野球選手に憧れていた少年が陸軍士官学校に入り、職業軍人の道に転じ、次第に社会問題と政治に目覚め、1992年にクーデタ未遂事件で服役、出獄後に政治活動に入り、次第に国民的人気を得て1999年に大統領選挙に当選、2001年頃からの反政府運動の激化と2002年のクーデタ発生による拘禁という最大の危機を乗り越えて、04年に大統領信任投票で圧倒的支持を受けるまでを中心に、その後の2006年1月までに起きたことを付け加え、ウーゴ・チャベスの50年の半生を克明に綴っている。

チャベスの政策や外交とその成果や問題点にはあまり触れられておらず、半生の行動を同志との離反や女性関係などの私生活とともに詳しく記録している。本書にも出てくる評論家や学者たちもチャベスを「ポピュリスト」「革命家」「独裁者」と様々に形容するが、まだチャベスについて結論は出せないと著者はその判断を読者に委ねている。

〔桜井 敏浩〕